

ジャカード発展期の祖

伊達虎一

明治初年、佐倉常七らによって伝えられた紋織機ジャカードは、西陣に産業革命をもたらした。明治十七年ごろまでの第一期を経て明治二十五ごろの第二期になると、有力機業家のほとんどに普及し、明治三十年前後の第三期には、もはや機業家の自家工場だけでなく、出機業者にまで普及してゆく。

ところが明治三十四年ごろから、小型多機能の新しいジャカードが現れ、それまでの機種に取って替り始めている。これは仏国製ヴェルドール機を模作したものであった。この機種が台頭したのは、従来の仕組では低口から高口になるにつれ大型化し、操作も困難でいちぢるしく生産性をそこなうためであった。

この時期になると西陣産地においても、工業生産の体制が整えられ、



ジャカードの機種そのものの見直しが始まったということが出来る。

明治三十五年、伊達虎一が伝えたヴァンサージ機は、そうした時代の要請にこたえるものであった。伊達はパリ万国博覧会に渡航し、同機のほか、その彫台、写真指図機などを持ち帰っている。ヴァンサージ機は、新ジャカードよりさらに小型で、しかも千三百口まで可能な構造になっていた。西陣の機業家のあいだに急速に普及していった。さらに伊達は、こうした機運の高まりの中で、ヴァンサージ機にそくした紋鑿を営む万産社を興し、この機種の普及を背後から支えている。この伊達の営為は伊沢信三郎へと受けつがれ、伊沢は輸入品をもとに国産機の開発に成功する。このようにしてヴァンサージ機はゆるぎないものとなってゆく。空引機でしか製織できなかった幽谷織なども、ヴァンサージ機の出現により、さらにすぐれた製品が織り出せるようになったという。

ジャカード普及の歴史を顧みるとき、伊達虎一は、まさにジャカードの充実発展期の祖ということができよう。

(丁)

(福本武久)